りすれば本住居の年代は平安時代に位置付けられる。

1号溝址　(図6)

調査地中央付近にて検出されたもので確認面からの掘り込みは浅くその一部を確認したにすぎない。南西から北東に直線的に伸びる溝とそれに交わって東に伸びる溝とが存在するが同一のものか否かは不明である。確認面での幅は平均30cm程で深さは最深部で20cm程である。断面形状は逆台形状を呈する。時期を決定する明確な遺物は出土していない。本溝址周辺には小ピットが比較的密集して検出されているが、明確な柱穴配置を取るものはなくその性格も不明といわざるをえない。

2号溝址　(図6)

調査地北側にて検出されたもので東側は調査区外となる。南西から北東へ伸びる形態を呈する。確認面での幅は平均1.50m程で掘り込みは平均5cmである。ただし溝址南半は2段にわたる掘り込みがなされており最深部の深さは約20cmである。図示しうるものはないが土師器破片がかなり出土しており時期的には平安時代に位置付けうる。

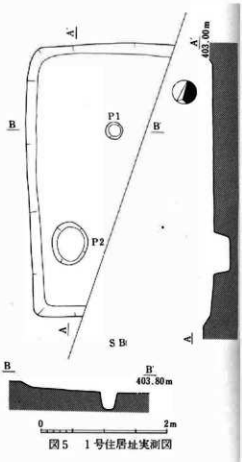


図5　1号住居址実測図

3号溝址　(図6)

調査地北端にて検出されたもので東と西はともに調査区外となる。南西から北東へ直線的に伸びる形態を呈し確認面での幅は平均約1.50mである。掘り込みの深さは平均10cm前後と浅いが掘り込みは比較的しっかりしている。覆土内より7図(5)の須恵器長頸瓶が出土しており、時期的には平安時代に位置付けられる。また覆土内には若干ではあるが弥生後期箱清水式期の土器も混入している。

4号溝址　(図4)

調査地中央付近にて検出したもので東側は調査区外となる。長さ約3m程を検出したのみであるが、あるいは土壙である可能性もある。確認面での幅は最大で2.0m深さは最深部で約30cmである。明確な時期決定の根拠となる遺物は出土していない。

1号土壙　(図6)

調査地南端にて検出された。平面プランは長径2.50m・短径1.50mの長楕円形を呈し、確認面からの掘り込みは平均5cm程である。覆土内には炭化物ならびに焼土粒が比較的多量に認められたが時期決定の明確な根拠となる遺物は出土していない。本遺構以南は地形的に落ち込み遺構が存在する可能性が少ないことよりすれば、この遺構が本遺跡の南端を画する可能性が高い。

2号土壙　（図6）

1号住居址西側で検出されたもので径3.70mほどの不整円形を呈する。確認面からの掘り込みは平均10cm程と浅くレンズ状に掘り込まれている。覆土内には炭化物が比較的顕著に認められた。中世と考えられる陶磁器破片が若干出土しているが明確な時期は不明である。

3号土壙　（図6）

1号住居址北側で検出されたもので、長径1.50m・短径1.0mの楕円形を呈する。確認面からの掘り込みは35cm程とやや深い。今回の調査で検出されたものの中では最も時期のさかのぼるものである可能性が高く、弥生時代後期・箱清水式期の甕型土器破片（図7－2）が出土している。また底面に接した状況で性格不明の鉄製品破片（図7－20）も出土しており注目される。

4号土壙　（図6）

3号土壙北側で検出したもので径1.10mほどの円形プランを呈し、確認面からの掘り込みは30cm程である。土師器の小破片が出土しているが図示しうるものはなくまた時期も不明である。

6号土壙　（図6）

調査地北側にて検出したもので、径2.50mほどのやや不整な円形プランを呈する。掘り込みは二段にわたってなされ最深部で約25cmを測る。覆土内より青磁碗（図7－3）が出土している。

その他の遺物　（図7）

直接遺構に伴わないが検出面出土の遺物には、弥生時代後期から中世にわたるものが出土している。(6)は弥生時代後期箱清水式期の壷型土器で頸部に櫛描丁字文が認められる。（8・9）は古墳時代後期のもので(8)は土師器高坏脚部、(9)は須恵器坏蓋である。（7・10・11・13～18）は平安時代のもので須恵器短径壷・甕・土師器坏などが出土している。(19)は鉄製品でおそらく鉄鏃であろう。

3　総括

以上のごとく今回の調査では住居址1軒、溝址4、土壙6基を検出した。出土遺物の様相からは、本遺跡は弥生時代後期～中世にわたる集落址の一部であることが予想されよう。特に弥生時代後期～平安時代にかけては、本調査地の北東約200mの地点にある浅川端遺跡との関連が想定され、浅川右岸に展開する比較的大規模な集落の南端付近に位置付けられる可能性が高い。また後期古墳を主体とする湯谷古墳群の存在からはその構成主体となった集落の問題が提起されよう。今回の調査にては残念ながら古墳時代後期の明確な遺構は検出しえなかったが本調査地付近に造営主体となった集落が展開する可能性が究めて高いものといえよう。また本調査地南東約50mには盛伝寺居館址が存在し、盛伝寺は天正年間に多田氏の居館址に寺を立てたものと伝えられる。第6号土壙出土の青磁碗破片はこれとの関連が想定されよう。

今回の調査は約330m²と究めて部分的な調査に終わったが浅川右岸に展開した古代集落の一部を明確にしたものといえよう。調査の実施に当たり事業主体者の傳田博司氏には埋蔵文化財の保護について多分なご理解ご協力を頂いた。末筆ではあるが御礼申し上げ調査の総括としたい。

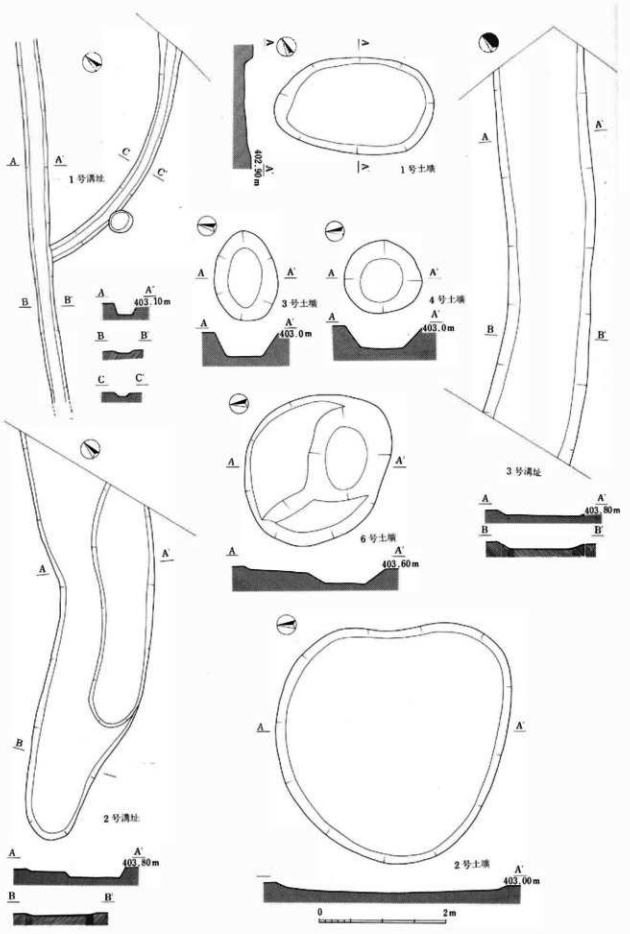

1号溝址
403.10m
1号土壙
402.50m
3号土壙
403.0m
4号土壙
403.0m
3号溝址
403.80m
6号土壙
403.60m
2号溝址
403.80m
2号土壙
403.00m
0
2m

図6　遺構実測図

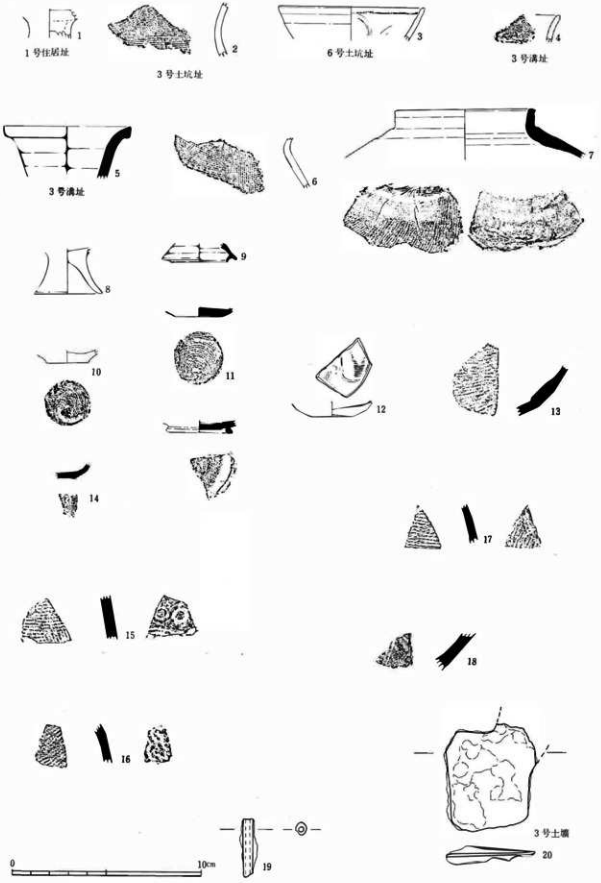

1
1号住居址
2
3号土坑址
3
6号土坑址
4
3号溝址
5
3号溝址
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
0
10cm
3号土壙
20

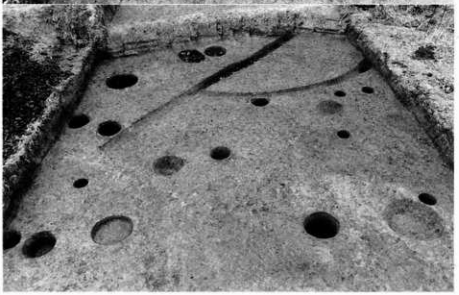
図7　出土遺物実測図

図版 1

調査地周辺の地形

1号住居址

2号土壙

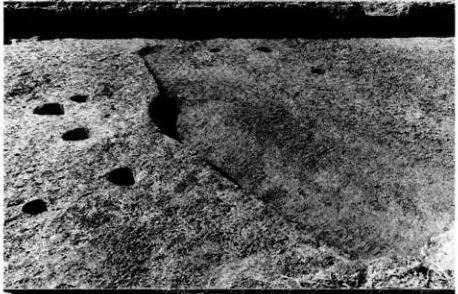


1号溝址

図版 3

6 号土壙

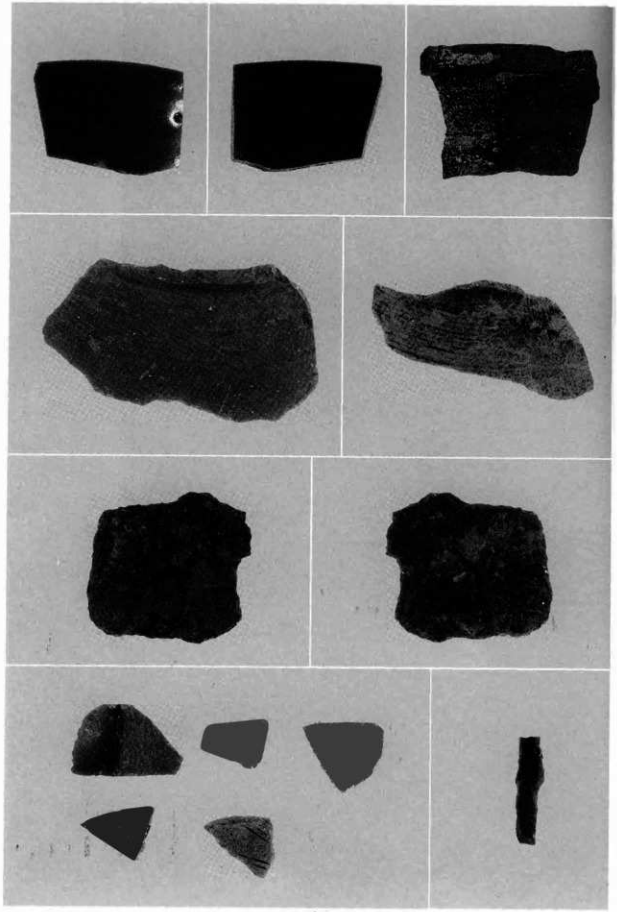
2 号溝址



3 号溝址

調査地全景

図版 5



出土遺物

浅川扇状地遺跡群

檀田遺跡

1991. 3
長野市教育委員会

例　言

1　本書は「北長野ゴルフセンター」建設事業にともない実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　調査は㈱長野ゴルフセンター代表取締役稲玉昌治（長野市川中島町御厨333番地）の委託を受けて長野市教育委員会が実施した。

3　調査地は長野市大字檀田字桜町313番１外の地籍に存在するが遺跡名は浅川扇状地遺跡群檀田遺跡とした。

4　調査によって得られた諸資料は長野市教育委員会（長野市埋蔵文化財センター）で保管している。出土遺物の注記記号は「浅川扇状地遺跡群檀田遺跡」の各頭文字をとって『AMD』と表記してある。

5　本書は調査によって確認検出された遺構・遺物を中心に、その基本資料を提示することに重点を置いた。資料掲載の要領は下記の通りである。

・資料は検出されたものの中から時期の明確に把握しうるものを中心に掲載した。
・遺構の測量は㈱写真測図研究所に委託し、コーディックシステムにより１：20の縮尺で基本原図を作成し、本書では基本的に１：60の縮尺に統一してある。
・遺構番号は調査時の仮番号をそのまま用いた。
・遺構実測図に関しては、土器１：４・石製品１：２・土器拓影１：３の縮尺に統一してある。
・出土土器観察表の記述は下記の要領で行なった。番号：図版番号と一致する。法量：実際の計測値ならびに推定復元による計測値を記入した。遺存度：図示した部分の遺存度を記した。色調・灰白色（A）・淡黄橙色（B）・暗黄橙色（C）・暗褐色（D）・黒褐色（E）とした。

目　　次

第1章　調査経過……1
1　調査に至る経過……1

第2章　調査地周辺の考古学的環境……4

第3章　調査
1　調査概要……6
2　調査……7
3　総括……9

挿図目次

図1　調査地ならびに周辺の遺跡（1：10,000）
図2　調査地ならびに周辺の遺跡（1：2,000）
図3　計画平面図ならびに調査地点・遺跡範囲指定図
図4　調査区全測図
図5　4地区・5地区遺構実測図
図6　6地区・7地区遺構実測図
図7　8地区・9地区遺構実測図
図8　11地区・12地区遺構実測図
図9　13地区・15地区遺構実測図
図10　16地区遺構実測図
図11　出土遺物実測図①
図12　出土遺物実測図②
図13　出土土器拓影

表　目　次

表1　検出土壙一覧表
表2　出土土器観察表

第1章　調査経過

1　調査に至る経過

平成2年春、有限会社　長野ゴルフセンター（長野市川中島町御厨333番地）は長野市大字檀田字桜町313番1他地籍の農地に、約19,800㎡にわたるゴルフ練習場「北長野ゴルフセンター」建設事業を計画した。

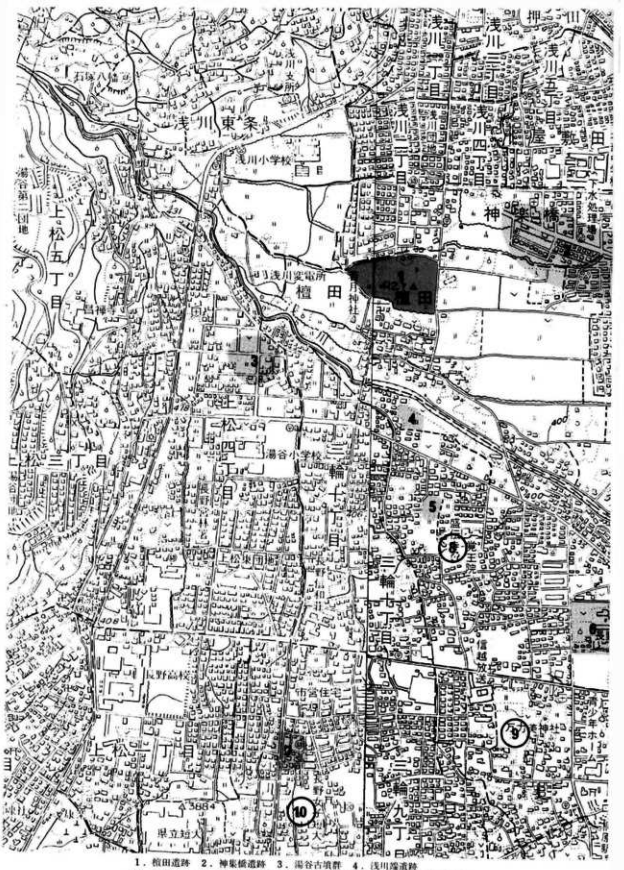
事業予定地は長野市内でも有数の規模を誇る「浅川扇状地遺跡群」の周知の範囲内に位置し、土器片等の散布も認められたために長野市埋蔵文化財センターは、同予定地内における埋蔵文化財の有無を確認するために試掘調査を実施することとした。

試掘調査は平成2年11月17日に実施し、試掘坑を事業予定位置内の任意の地点A～Dの4箇所設定した（図3）。その結果A・Bの2地点においてかなりの量の遺物ならびに遺構らしき黒色土の落ち込みを確認した。

この試掘調査の結果をもとに、長野市埋蔵文化財センターでは施行に先立って発掘調査による記録保存の必要性を認め、平成2年12月10日より発掘調査に着手する運びとなった。

試掘調査の結果事業予定地の西側約半分が遺跡範囲に含まれるものと予想されたが、この部分は盛り土によって造成されるため、調査は施行によって直接遺構面にまで掘削がおよび埋蔵文化財の破壊されることが予想される、フェンス支柱部分16箇所約360㎡について実施した。

なお本遺跡は、前述のとおり周知の「浅川扇状地遺跡群」の範囲内に位置し、その名称については所在地の字名をとり「浅川扇状地遺跡群　檀田遺跡」として報告する。しかし今回の調査はあくまで試掘調査的な性格のもので、今後の調査による遺跡範囲・遺跡の性格等の明瞭化にともないその名称については改めて検討する必要が認められる点指摘しておく。



1．檀田遺跡　2．神楽橋遺跡　3．湯谷古墳群　4．浅川端遺跡
5．押端遺跡　6．吉田高校グランド遺跡　7．下宇木遺跡　8．遠合寺屋敷址
9．押端城址　10．相ノ木城址

図1　調査地ならびに周辺の遺跡（1：10,000）

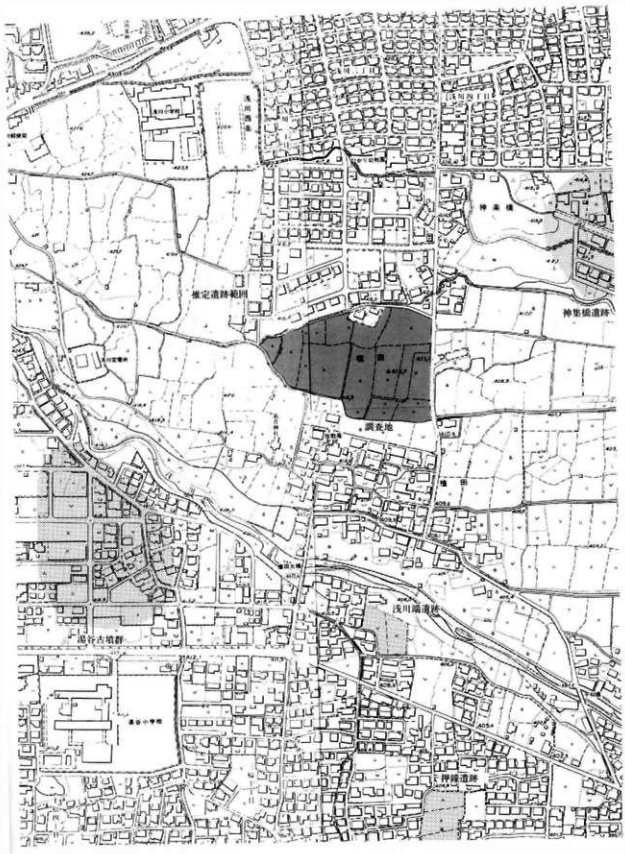


図2　調査地ならびに周辺の遺跡（1：2,000）

第２章　調査地周辺の考古学的環境

飯綱山を水源とする浅川は山間部を侵食流下した後、浅川東条地籍の通称浅川原口を谷口として盆地に流入し、東南方向を主軸とした平均斜度１／45を計測する典型的な扇状地を形成する。この扇状地上には多くの遺跡が存在し、長野市内でも有数の規模を誇る「浅川扇状地遺跡群」として把握されている。今回の調査地点も浅川扇状地扇央付近に位置し同遺跡群の周知の範囲内に位置する。以下浅川扇状地遺跡群の代表的な遺跡について概説し、周辺の考古学的環境としたい。

旧石器時代は、浅川源流に近い猫又池・大池に遺跡が確認されているが扇状地上にはその存在は確認されていない。

続く縄文時代には、湯谷・赤萱平・刈田・牟礼バイパスＡ地点・徳間榎木田・浅川端の各遺跡が確認されている。これらはともに駒沢川と、浅川流域に集中する傾向が認められ、正式調査を受けた遺跡としては前者に牟礼バイパスＡ地点遺跡、後者に浅川端遺跡がある。牟礼バイパスＡ地点遺跡では前期前葉の住居址１軒、浅川端遺跡では同じく前期前葉の住居址１軒、土壙１基が検出されている。

浅川扇状地の本格的な開発は次ぎの弥生時代から始まったものといえる。主要な遺跡には徳間小学校遺跡・牟礼バイパスＤ地点遺跡・神楽橋遺跡・浅川端遺跡・吉田高校グランド遺跡等がある。徳間小学校遺跡では中期終末の住居址２軒が検出されているが、近年周辺が土地区画整理事業に伴って調査され、同時期の集落が数箇所検出されている。牟礼バイパスＤ地点遺跡では中期栗林式期の住居址４軒・土壙１基、浅川端遺跡では同時期の住居址２軒・土器集積１が検出されているがともに従来不明瞭であった栗林式前葉のもので、良好な資料といえよう。吉田高校グランド遺跡は後期初頭吉田式土器の標識遺跡で、特に第３次調査では住居址10軒からなる当該期の単一集落が良好な状態で検出されている。浅川扇状地状にて検出された上記の諸遺跡はいずれも中期～後期初頭に限られ、後期後半の箱清水式期の遺跡はその存在が希薄であり、少なくとも現状では中期～後期初頭の大規模集落と箱清水式期の大規模集落とが分布上一致することはない。この状況が善光寺平の他の地域にもそのままあてはまるか否かは不明であるが、その背後には生産もしくは生活様式の差異といった根本的な要因が認められる可能性もあり今後の重要な検討課題である。

古墳時代に入り浅川扇状地を特徴付けるのは中期集落の展開であろう。有名な駒沢祭祀遺跡をはじめとして、近年牟礼バイパスＢ地点遺跡・下宇木遺跡など良好な集落遺跡の検出例が増えており、その集中度は善光寺平の中でも特異である。さらにこれらの諸遺跡では陶邑編年Ｉ型式２段階～４段階に対応すると考えられる古手の須恵器が比較的集中して出土する傾向が顕著であり、この点も善光寺平の中では特徴的である。犀川以北の盟主的な古墳群である地附山古墳群の保有した多量の須恵器の存在を合わせ考えるとき、当該期における浅川扇状地の重要性がにわかにクローズアップされてこよう。

古墳時代後期～平安時代にかけては比較的継続して集落が展開する。浅川西条遺跡・牟礼バイパスＢ・Ｃ・Ｄ地点、三輪遺跡などが代表的な遺跡といえよう。ただし大規模集落が長期間にわたって同一箇所に存在するのではなく、時期ごとに立地を異にしつつ中核的な集落が形成されている可能性が高い。

また平安時代末期にはこの地域に信濃28牧のうち吉田牧が設けられており、駒弓・桐原牧神社や駒沢などはその名残と考えられ、広大な扇状地は好適な放牧地であったと考えられる。

中世にはこの地域は若槻庄の領域となり、若槻里城をはじめ本堀・押鐘・桐原・相ノ木・平林・和田などの城館址が存在する。

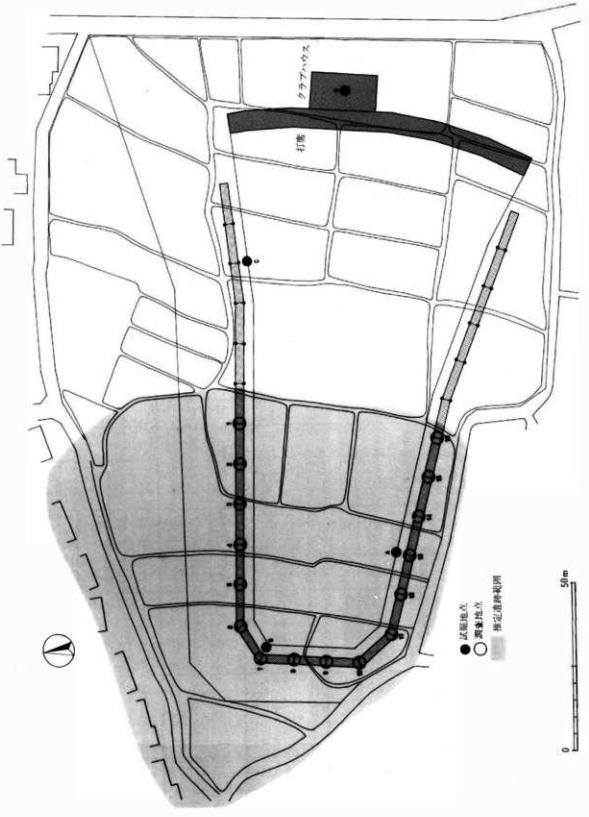


図3　計画平面図ならびに調査地点、遺跡範囲、推定図

第3章　調　　査

1　調査概要

前述のごとく調査はフェンス支柱の埋設部分（約20㎡）16箇所について実施したものであり、その性格はあくまで試掘調査的なものである。調査の結果住居址11軒・土壙14基・溝址３・柱穴多数を検出した。検出された遺構の時期は平安時代のものが主体を占めるが、遺構外出土資料としては縄文時代中期・弥生時代・古墳時代中・後期の資料が若干検出されており、本遺跡の複雑な性格を物語っている。

次ぎに遺跡範囲の問題であるが、事業予定地東半は地形的に一段下がり試掘調査の結果にても包含層等確認されておらず遺跡範囲からは外れる。調査開始以前は本遺跡東方約200mに存在する神楽堀遺跡との関連が想定されたがこれとは明確に異なる遺跡であることが確認された。ところが調査中に周辺の表面採集を行なったところ遺物の散布は本遺跡より西方に濃密に認められ、檀田集落の西端に位置する若月神社から中部電力浅川変電所あたりが遺跡範囲として想定されることが判明した（図２）。今回の調査地は浅川沿いに展開する集落の東端付近にあたることが予想されよう。

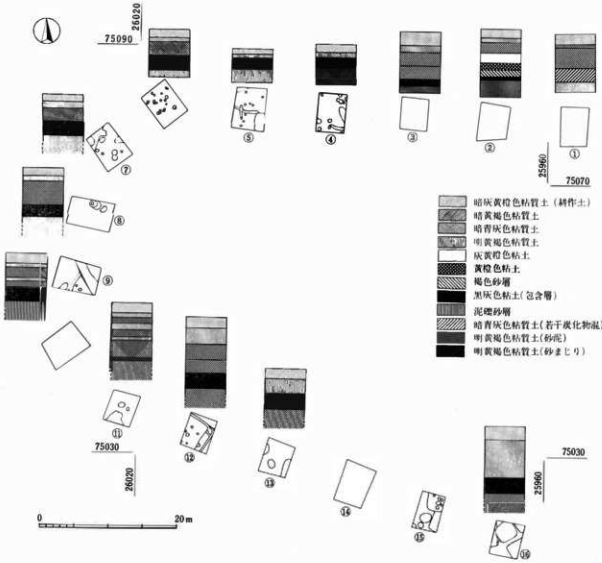


図４　調査区全割図

2　調査

1号住居址　（図9・12）

15調査区にて検出したもので2号住居址を切って構築されている。住居址西南隅約¼を検出したのみで規模等不明であるが、形状は隅丸方形プランが予想される。柱穴はP1～P6が検出されているがすべてが本住居址に伴うものではない。深さはP1—29cm・P2—12cm・P3—15cm・P4—23cm・P5—30cm・P6—21cmである。確認面からの掘り込みは15cm程である。出土遺物には（25～27）があるが（25・26）は弥生時代中期の栗林式土器で混入品である。(27)が本住居に伴うものと考えられ、時期的には古墳時代後期に位置付けられる。

2号住居址　（図9）

15調査区にて検出したもので北側を1号住居址に切られる。また東側は大半が調査区外となり規模等不明である。形状は隅丸方形プランが予想される。住居址南壁際に深さ22cmの土壙状の落ち込みが検出されているが本住居址に直接伴うものか否か不明である。土師器の小破片がかなり出土しているが図示しうるものはなく、また時期決定の根拠になるものもない。ただし1号住居址に切られていることよりすれば古墳時代後期以前には位置付けられよう。

3号住居址　（図10）

16調査区にて検出されたもので4号住居址を切って構築され北側は若干が調査区外となる。一辺約2.65mの隅丸方形プランを呈する小型の住居址である。確認面からの掘り込みは平均25cm程とやや深く、床面も全体に比較的固く締まっていた。北東壁際の床面上に焼土と炭化物の堆積が確認されたが、かまどに関する施設は確認されていない。柱穴は焼土のわきと北東壁に2本検出されており、深さはそれぞれ18cm・20cmを計る。出土遺物は（28・29）で時期的には平安時代に位置付けられる。

4号住居址　（図10）

16調査区にて検出されたもので3号住居址に一部を切られ、また西側は大半が調査区外となる。形状・規模等詳細は不明である。確認面からの掘り込みも5cm程と浅い。床面は全体に軟弱なものであるが炭化物や焼土が顕著に認められた。出土遺物に図示しうるものはなくまた時期決定の根拠になるものもない。ただし3号住居址に切られていることよりすれば平安時代以前には位置付けられよう。

5号住居址　（図10）

16調査区にて検出されたもので、住居址南西隅の一部を確認したのみである。形状・規模等不明であるが隅丸方形プランが予想される。確認面からの掘り込みは平均18cm程で床面は比較的固く締まっていた。出土遺物に図示しうるものはなく時期も不明である。

6号住居址　（図10）

16調査区にて検出されたもので2／3が調査区外となる。規模は不明であるが、形状はやや不正な隅丸方形プランが予想される。北壁際の覆土内に比較的多量の炭化物が検出されたが、かまど等の施設は確認されていない。確認面からの掘り込みは平均25cmと深い。土師器の小破片が出土しているが時期不明である。

7号住居址　（図9）

13調査区にて検出されたもので、大半が調査区外となり規模等詳細は不明である。形状は隅丸方形プランが予想される。確認面からの掘り込みは5㎝程と浅く床面も軟弱なものであった。柱穴はＰ１－Ｐ３が検出されている。深さはＰ１―８㎝・Ｐ２―６㎝・Ｐ３―23㎝で、Ｐ１とＰ２は浅いが位置的に主柱穴となる可能性がある。土師器・須恵器の小破片が出土しているが時期不明である。

8号住居址　（図8・11）

12調査区にて検出されたもので、一辺5ｍ以上を測る大型の住居址で、今回の調査にて検出されたものの中では最大の住居址である。南側と西側が調査区外となり規模等詳細は不明であるが、形状は隅丸方形プランが予想される。確認面からの掘り込みは平均25㎝程とやや深い。柱穴はＰ１～Ｐ７が検出されており、深さはＰ１―39㎝・Ｐ２―29㎝・Ｐ３―29㎝・Ｐ４―40㎝・Ｐ５―32㎝・Ｐ６―12㎝・Ｐ７―11㎝を測る。床面は全体に軟弱で不明瞭なものであった。東壁際は約90㎝ほどの幅で5㎝程一段高く構築されており、ベッド状遺構的な性格も考えられるが詳細は不明である。（14～24）が出土しているがいずれも覆土内からである。時期的には平安時代に位置付けられる。

9号住居址　（図8・11）

11調査区にて検出されたもので大半が調査区外となり形状・規模等不明である。住居址北隅に多量の炭化物・焼土と共に角礫が検出されており、破壊されたかまど址と考えられる。確認面からの掘り込みは平均5㎝程と浅く、北壁は明確に検出しえなかった。（11～13）が出土しているが（12・13）はかまどより出土している。時期的には平安時代に位置付けられよう。

10号住居址　（図6・11）

7調査区にて検出されたもので大半が調査区外となり形状・規模等詳細は不明である。内部に深さ24㎝ほどの土壙状の落ち込みが検出されているが本住居址に伴うものか不明である。確認面からの掘り込みは平均9㎝程である。（1～8）が出土しているがいずれも覆土内からの出土である。時期的には平安時代に位置付けられる。

11号住居址　（図5）

5調査区にて検出したもので大半が調査区外となり規模等詳細は不明である。形状は隅丸方形プランが予想される。確認面からの掘り込みは18㎝とやや深いが床面は軟弱なものである。土師器破片が出土しているが図示しうるものはない。覆土内より滑石製錘車⑳が出土している。時期的には古墳時代にまでさかのぼる可能性が高い。

1号溝址　（図5）

4調査区にて検出したもので、長さ2ｍ程を確認したのみで東側は調査区外となる。幅30㎝・深さ13㎝程で断面逆台形状を呈する。土師器・須恵器の小破片が出土しているが時期は不明である。

2号溝址　（図7・11）

9調査区にて検出したもので北西から南東に直線的に伸びる形態を呈する。幅平均1.50ｍで深さは北西で18㎝、南東で22㎝を測る。覆土内より（9・10）が出土している。時期的には古墳時代中期にまでさかのぼる可能性が

ある。

3号溝址　（図5）

5調査区にて検出したもので西側は調査区外となる。幅平均30cm・深さ10cmを測る。土師器小破片が出土しているが時期は不明である。

3　総括

以上のごとく今回の調査では住居址11軒、溝址3、土壙14基を検出した。調査の性格上いずれも部分的に確認したのみであるが本遺跡の概要はある程度推定できよう。

先ず今回の調査にて時期的にもっともさかのぼるのは弥生時代中期栗林式期である。遺構の検出こそなかったが比較的多くの土器が出土している。これらの土器群は拓影に示したごとく壺型土器では、篦描沈線によって区画した文様帯内に櫛描直線文・櫛描押引文・篦連続押引文を充塡するものが主体を占め、また変形工学文的な篦描沈線内に連続押引文を充塡するものも認められる。これらの特徴は栗林式土器の中でも比較的古い時期に位置付けられ従来認識されてた栗林1式（栗林式古段階）と把握しうるものであろう。

浅川扇状地遺跡群において縄文期以降新たに集落の形成されるのはほとんど栗林式期であり本遺跡も例外ではない。この点浅川扇状地遺跡群の一つの特徴ととらえられよう。続く弥生後期の箱清水式は若干検出されているのみで第2章でのべたごとくこの点も例外ではない。栗林式期の集落としては付近に神楽橋遺跡と浅川端遺跡が存在するがこれらの遺跡群との関連も今後の検討課題となろう。

本遺跡で次に生活の痕跡が認められるのは古墳時代後期になってからである。2軒の住居址（1号・2号）を検出しているが集落構造等不明といわざるをえない。2号溝址出土の高坏を考慮するならば古墳時代中期にまでその形成時期がさかのぼる可能性も考えられる。古墳時代前期の集落分布が希薄なわりに中期の集落が広範囲に展開する点も浅川扇状地遺跡群の特徴の一つであり、本遺跡にても今後の調査に期待されよう。

今回の調査にては奈良時代の明確な遺構は検出されていないが古墳時代後期以降平安時代に至るまで継続的に集落が形成されていたことが予想される。特に今回は平安期の遺構が集中的に検出されており本遺跡の主体を占めるものといえよう。ただし出土土器の様相からすれば須恵器の伴出は少なく、黒色土器・灰釉陶器などが主体を占める点よりすれば集落形成の中心は平安時代後期に求められよう。

遺跡範囲については調査概要の項でも述べたが、周辺の分布調査の結果その主体は今回の調査地点以西に求められるようである。あるいは調査地南側に展開する現在の檀田集落もその大部分が遺跡範囲として把握できよう。

以上のことより本遺跡は浅川左岸に展開した弥生時代中期から平安時代にわたる集落遺跡として位置付けられるが、浅川をはさんで対岸に展開する浅川端遺跡や、既に湮滅した湯谷古墳群の存在を合わせ考えるならば、古代に展開した一大生活領域として改めて理解しなおすことが可能でありまた必要とされよう。いずれにせよ今回の調査はその端緒であり、詳細は将来的な検討に委ねたい。

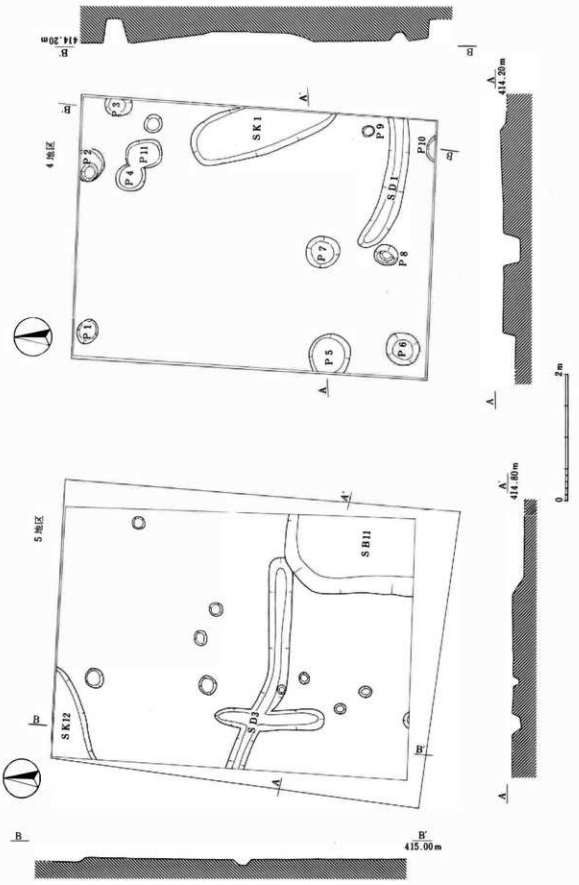


図5　4地区・5地区遺構実測図

図6　6地区・7地区遺構実測図

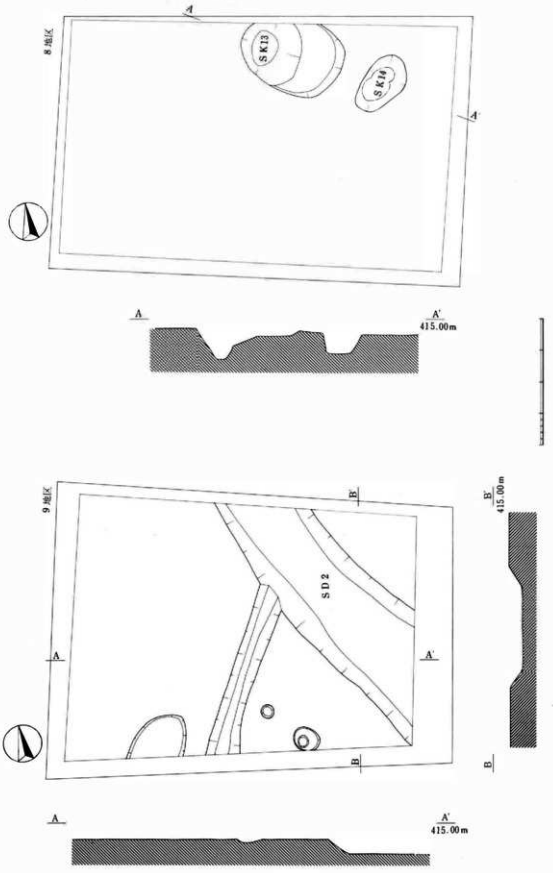


図7　8地区・9地区遺構実測図

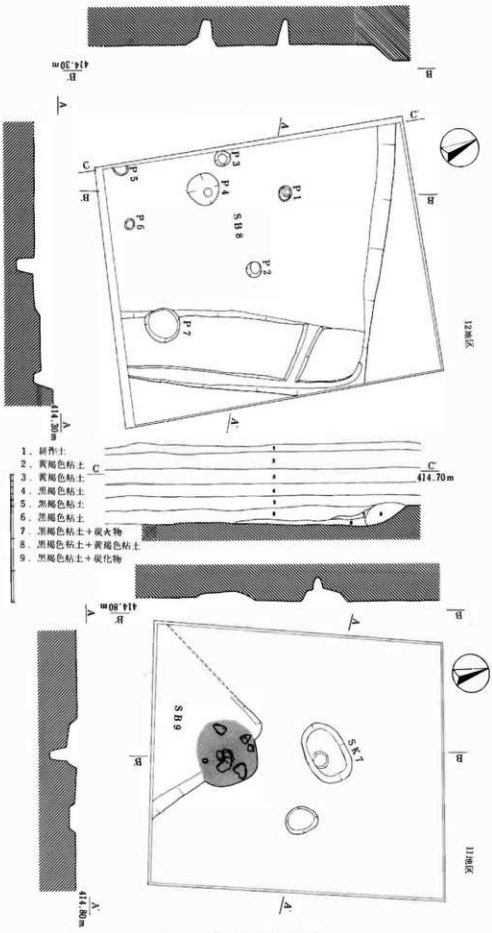


図8　11地区・12地区遺構実測図

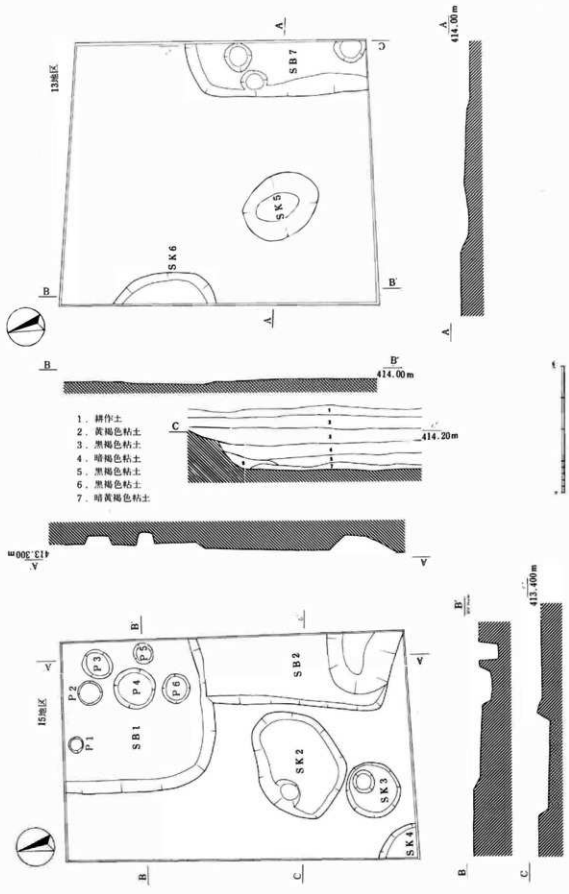


図9　13地区・15地区遺構実測図

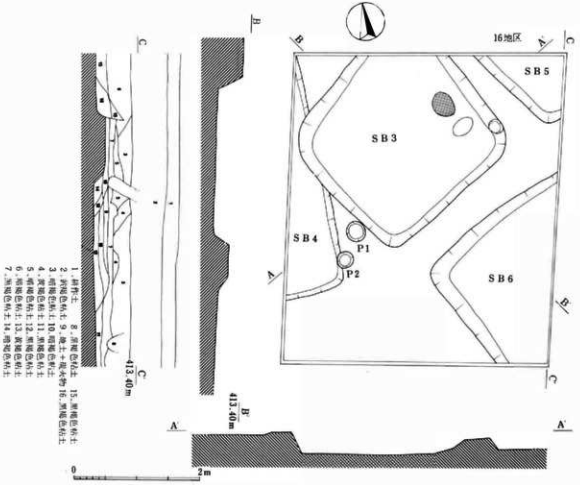


図10　16地区遺構実測図

No.	地区	長径×短径×深さ（m）	時期
1号土壙	4	2.40×0.90×0.16	不明
2号土壙	15	1.80×1.40×0.20	〃
3号土壙	15	0.90×0.90×0.43	〃
4号土壙	15	×　×0.11	〃
5号土壙	13	1.30×1.00×0.15	〃
6号土壙	13	1.70×　×0.05	〃
7号土壙	11	1.00×0.60×0.30	〃
8号土壙	7	0.80×0.70×0.35	〃
9号土壙	7	0.80×　×0.16	〃
10号土壙	7	0.90×0.70×0.11	〃
11号土壙	7	1.00×0.80×0.15	〃
12号土壙	5	×　×0.05	〃
13号土壙	8	1.70×1.20×0.49	〃
14号土壙	8	1.0 ×0.60×0.30	〃

土壙一覧表

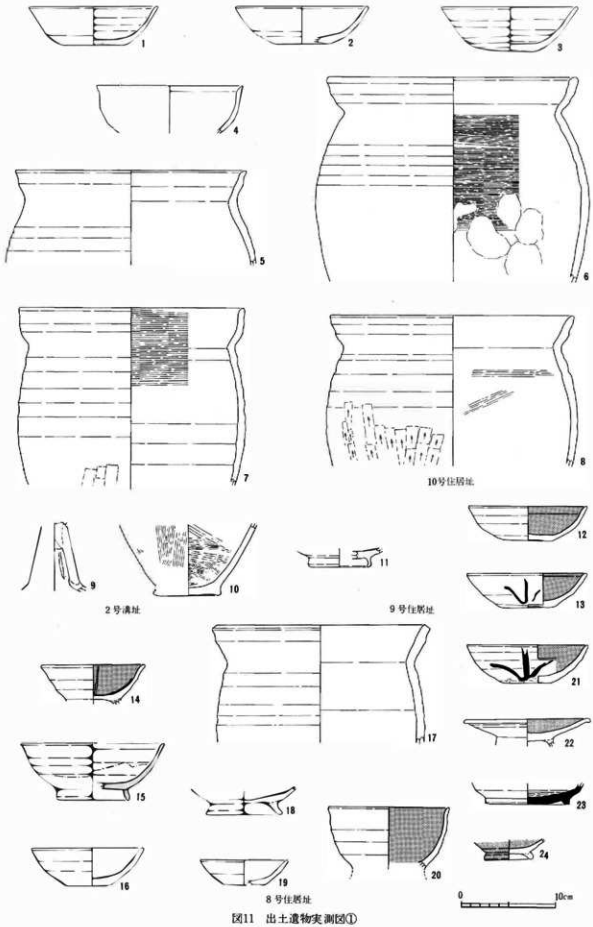


図11　出土遺物実測図①

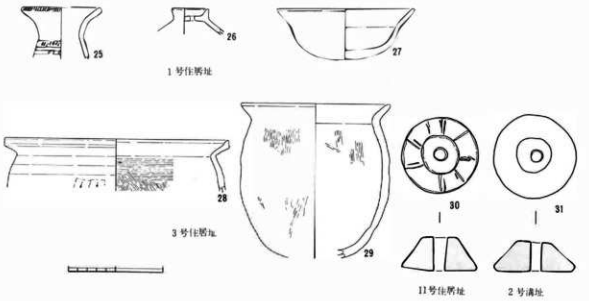


図12　出土遺物実測図②－1

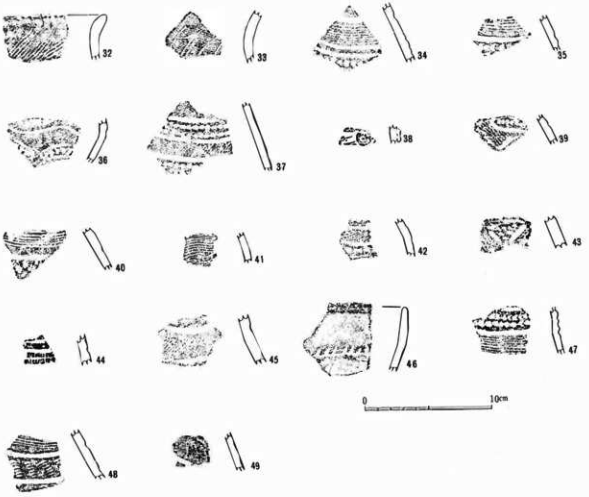


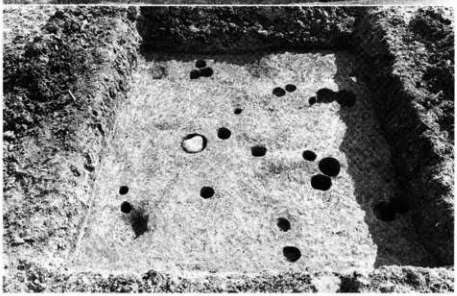
図13　出土土器拓影

No.	器種	法量 (cm)			遺存度	色調	整形・調整	備考
		口径	底径	器高				
1	坏	14.6	6.8	4.0	1/4	D	ロクロナデ　底部：回転糸切り	土師器
2	坏	14.2	6.2	4.0	1/3	D	ロクロナデ　底部：回転糸切り	〃
3	坏	14.6	5.4	4.6	2/3	C	ロクロナデ　底部：回転糸切り	〃
4	坏	15.4				B	箆磨き	〃
5	甕	24.4			1/4	D	ロクロナデ　内面：カキメ→ロクロナデ	〃
6	甕	26.8			1/4	D	外面：ロクロナデ→縦箆削り　内面：カキメ	〃
7	甕	23.8			1/4	D	外面：ロクロナデ→縦箆削り　内面：カキメ	〃
8	甕	26			1/5	C	外面：ロクロナデ→縦箆削り　内面：ハケ→ナデ	〃
9	高坏				2/3	C	外面：箆磨き　内面：ナデ	〃
10	甕		7.1		1/6	E	ハケ→ナデ	〃
11	高台坏		6.8		1/4	A	ロクロナデ	灰釉陶器
12	坏	12.7	5.2	3.6	1/2	D	外：ロクロナデ　内：黒色処理	土師器
13	坏	12.8	5.2	3.6	3/4	D	外：ロクロナデ、墨書　内：黒色処理	〃
14	高台坏	11.0			2/3	B	外：ロクロナデ　内：黒色処理　暗文	〃
15	高台坏	15.2	7.8	6.0	1/2	A	ロクロナデ	灰釉陶器
16	坏	11.9	5.1	4	1/3	C	ロクロナデ　底部：回転糸切り	土師器
17	甕	22.8			1/5	D	ロクロナデ	〃
18	高台坏		8.0		1/4	D	ロクロナデ	〃
19	坏	9.2	4.2	2.7	1/6	B	ロクロナデ　底部：回転糸切り	〃
20	高台坏	12.8			1/4	C	外：ロクロナデ　内：黒色処理	〃
21	坏	13.0	5.0	4.0	3/4	C	外：ロクロナデ→静止削り、墨書　内：黒色処理	〃
22	高台皿	13.7			1/2	C	外：ロクロナデ　内：黒色処理	〃
23	高台坏		9.0		1/2		外：ロクロナデ　底部：回転糸切り	須恵器
24	高台坏		5.2		1/2	B	内外面黒色処理	土師器
25	壺	8.6			2/3	B	口唇：LR縄文　頸：沈線区画、縄文　箆磨き	弥生
26	蓋				1/2	C	箆磨き	〃
27	坏	19.6	1.5	5.4	1/3	B	箆磨き	土師器
28	甕	23.6			1/6	C	外：ロクロナデ→箆削り　内：カキメ	〃
29	甕	15.7			1/3	D	ハケ→ナデ	〃

出土土器観察表

調査区 4

調査区 5



調査区 6

図版 2

調査区 7

調査区 8

調査区 9

調査区11

調査区12

調査区13

図版4

調査区15

1号住居跡

調査区16

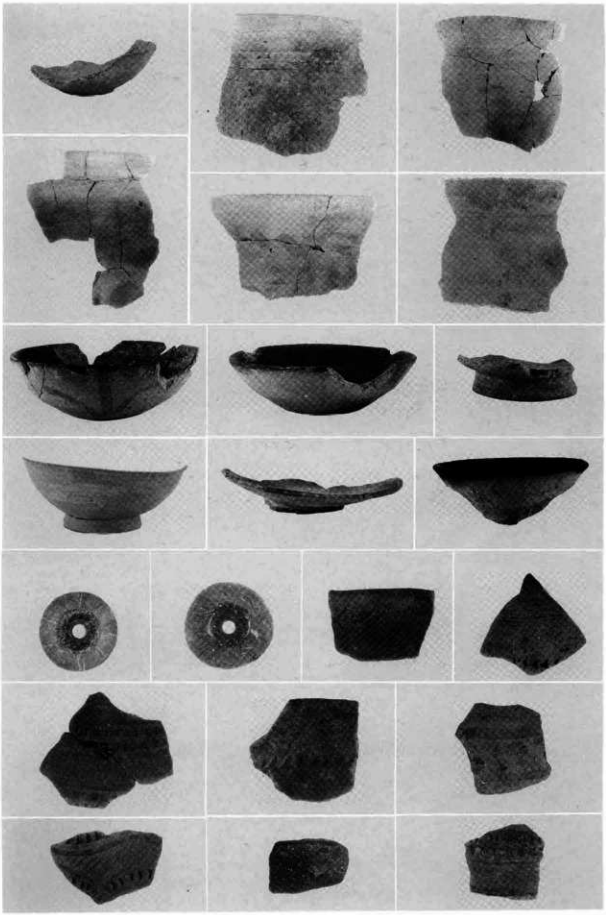
3号住居址

4号住居址

6号住居址

図版6

調査風景



長野市の埋蔵文化財第41集

小島柳原遺跡群中俣遺跡
浅川扇状地遺跡群　押鐘遺跡・檀田遺跡

平成3年3月25日　印刷
平成3年3月31日　発行

編　集　長野市教育委員会
発　行　長野市埋蔵文化財センター

印　刷　信毎書籍印刷株式会社